

英子は、ぶつくりと黙つて、貧しい風をした友達の姿をぢつと見てゐた。

友達は数分間、だまつてゐた後で、斯う云つて立上つた。

「然う。では又いらつしやいませ。」

英子も斯う云つて、友達といつしよに立つた。その友達の眼が、涙でいつぱいになつてゐたのを英子は見付けた。

「何か御用があつたのぢやないんですか。」

英子は、友達の涙を見ると、急に氣の毒になつて、かう云つて見たが、友達は、

「いえ。」

と云つて、其の儘歸つて行つた。

其の後姿を見送つた時に、英子は初めて友達が單衣物てゐた事に氣が付いた。單衣物に羽織を重ねて、あの人は何をしに歩いてゐるのだらう。

「もつと親切に話をしてやればよかつた。私は悪いことをした。」



小説 暮れがた 水野 仙子

「兄さん、今度の女中は居つくかも知れないね、私はなんだかそんな氣がするよ。」と那須の老人は若者のやうにつやくした豊かな頬に笑みを湛えて、晝過ぎの休みに安心したやうな體を息子子の枕許に落着けた。

「お疲れなすつたでせう。」と息子は母親を勞らひながら、仰向けになつて目を通してゐた新聞をばさりと置いて、少し起きかへるやうにした。

「ま、禱でもお取んなさい。」

「ほんとにね、ほい。」と老人は元氣よく言つて襷を取りながら、「ちやもう二時になるのかい？」

「朝が遅いから、順繰りにお晝もおそくなりませよ。」

英子は、自分より一とつ年下の、今の友達を、急に哀れに思ひしみながら、それでも、昔の高慢さを失はない友達の顔付を小憎くも思つた。

英子は縁側におきつ放しにしてきた花瓶の菊を、女中に此處へ上げさせた。そうして鏡の前に白菊を置いて、鏡のうちに白菊の映つた姿を、美しいと思つて眺めたりした。水に浸る女の白い肌のやうな感じだと思つた。英子は繪葉書に、

「いま、私の眼の前に、水の中に浸つてゐる處女の白い肌が見えます。この白い肌は、いくら切つても血は出ませんよ。」

と書いた。さつき「夢はさらひです」と云つてよめた友達のところへ送るつもりで、其の名を書いた。

「今日は何をしやう。どうして暮らそう。」

英子は斯う思ひながら、開いてゐる窓の外を見た。紅葉の葉が、薄ら冷めたい風にこまかく、ちり／＼とよるへてゐる。其のこまかな戦への中から、無限の寂しさか、英子の眼の奥へとだん／＼に湧きひろがつていつた。(をはり)

「さうだねえ、二時と——三時、まあ四時までには歸れるだらうねえ。」

「秋がですか？え、たゞ行つて来るだけなら往復二時間もあつたら澤山ですよ。だけど少しは緩りして来るてせうから。」

「さうだねえ、あれはほんとに氣が利いてるよ。」

「第一小綺麗でようござんすよ。」

「さうだねえ、それに行儀もいゝし。なんだつていのよ、逗子でね、酒匂さんとかなんとかいふ子爵の家に奉公してたことがあるんだつてね、家もそんなに悪くはないやうな話だつたよ。」

「さうですか、何しろあの留の奴にはひどい目にあつたからな、あいつの顔を見ると胸くそがわるくなつて仕様がなかつた。」と言つて、息子は絡んで来る痰を痰壺に取つた。

「寒くはないかい？」と老人はその顔を覗くやうにして、「なんだか少し冷えて来たやうぢやないか、ねえ兄さん。」

「さうだねえ、あれはほんとに氣が利いてるよ。」

「第一小綺麗でようござんすよ。」

「さうだねえ、それに行儀もいゝし。なんだつていのよ、逗子でね、酒匂さんとかなんとかいふ子爵の家に奉公してたことがあるんだつてね、家もそんなに悪くはないやうな話だつたよ。」

「さうですか、何しろあの留の奴にはひどい目にあつたからな、あいつの顔を見ると胸くそがわるくなつて仕様がなかつた。」と言つて、息子は絡んで来る痰を痰壺に取つた。

「寒くはないかい？」と老人はその顔を覗くやうにして、「なんだか少し冷えて来たやうぢやないか、ねえ兄さん。」

「寒くはないけれど、手だけ出してものを讀んでると手がつめたい。」

「さうだらうねえ、今朝まであんなに日が照つてたのに、なんだか變に曇つて来たやうだよ。」とあしまひを獨り言のやうにしてしまつて、老人は硝子戸越しに海の方を眺めやつた。

「雲の幾重も〜の奥からさして来るやうに、日の光りはなんとなく濁りを含んでゐる。ものゝ染みほど薄くぼんやりと見える伊豆あたりの島影が、空と海との境をなして、そこから小敏捷く走つて来る一連の波が、だん〜近く大きくなつて来たと思ふと、やがてどつたりとその先頭を岸に打上げて、今度はさあと逃げるやうに引いて行く。宏い〜量り知られぬ心のやうに、ゆつたりと構へてゐる沖の方に、一つ二つ浮いてゐる船が、遠目には動くとも動かないともつかずに漂つてゐる。」

「あの船がねお母さん、そら右の手の方の少し大きいやつさ、私が今朝起きた時から出てゐるんですよ、いつ

てすね〜いつまで待つても歸つて来ない人を待つやうな變な氣がするんですよ。」

波はさぶりと絶えざる仕事のやうに、一つの調子をもつて寄せては引いて行つた。時を知らない蠅の群れが、精一つばいの身動きを試みては、鈍つた神經を休めるやうに、曇といはず障子といはずにその小さな黒い點々を吸ひつけてゐる。

「おや〜」と老人は眼鏡に手を掛けたまゝ言つて、わざと息子の寂しさを誘ふやうな言葉には答へなかつた。「眼鏡をかけるとなるほどよく見えるんだねえ、私は今まであんなところに赤いものがあるのなんぞ知らなかつたよ。兄さんあれは家だらうか？」

「え、高い山の上みたいなのところにあるんでせう、あれは西洋人の別荘なさうですよ。私が此地に來たばかりの頃は、あの家の近くまで行つてみようと思つて、歩いたりしたつげがなあ。」

かう言つて息子が吸入るのを、老人は氣づかはしさを振りかへつてもとの座にかへつた。そして、

までも〜おんなじところに居るんですよ。漁でもしてゐるのでせうね、時々人が動くのが見えるんですよ。だけれど、とてもお母さんにはお見えになりません。それでも眼鏡を持つて来てごらんさない、え、黒いぼち〜したものが時々動くんですよ。え、よつほどちつとして見て見えないとわかりませんよ。」

「さうかい。」と老人はすなほに起つて、硝子戸の棧に割られた海の遙かな方へと先刻から目をやつてゐた。

「私にはたゞお船が二つ見えるだけだがねえ。」

「さうでせうね、私は海さへ見るつてと、あの船があるそこにちつとしてゐるものだから、つひ氣になり出して今度は〜つて見てみるんですよ、だけれど人が幾人乗つてるんだかはどうしてもわからない。」

「おや、こつちのは歸つて来るやうぢやないかい？」
「さうです、お母さんはすつと〜向ふに、櫓柱だけちよんびりと見えるのがお見えになりますか？さう

でせうね、あれが見えると面白いんだがな、櫓柱だけ見えて見えなくなつてしまふのはなんだか寂しいもん

「秋やが早く歸つてくれ〜ばい、がねえ、もうそろそろ三時だらう。」と獨り言のやうに言つた。

「何かもの足らなさに曇つた日が、潮風に洒されたそこらを殊に灰色にしてゐる。寝ながら海が見たいといふので、家のつくりや何かは構はずに借りた家なつたやうに風が盗み入つて來たりする。廣く芝生が一面に敷いてあるだけで、庭には目を慰めるやうな草も木もなかつた。」

棟つゞきの宿屋の庭から、遊動木の揺れる音がキイ〜と寂しく聞えて來る。時折若い女のヒステリカルに笑ふ聲がそれに交つた。かた〜と硝子戸が慄へるのは、どうやら少し風が出たものと見える。庭先の土手の下に言ひ罵る聲がすると思ふと、いつの間にかそこに歸つて來てゐる一つの漁船が、弄ぶやうに戯れては逃げて行く波のしぶきに濡れて、二三人の男の喚き

聲に濱へ上り惱んでゐる。

「蜜柑船がついたつてね、へ〜へ〜。」

「しつ」と老人はぎよつとして逐いやりながら、また「へへへへ」と笑ひ、庭を横切つて行くその後姿を見送つた。

二人には廣過ぎる家が暫くひつそりとして、浪の音が限りもない餘韻のうちはその響をつゞけてゐる。人の目を馴らす周到な日の用意のやうに、海の面にも、空の色にも、少しづつ濃さを籠めて行つて、瞬くひまも心を許さない冬の日は、やう／＼人の心に迫つて来た。

先刻から時計ばかり氣にしてゐた老人は、我にもないさま／＼な雑念に思はぬ時を過してゐるのに驚いた。もういつか四時に迫つてゐる。と急に事新しく何やら不安になり出して、今朝荷物を取りに行くといつて、返子の家まで歸つた女中のことが氣になり出した。「若しや」とふと思ふと同時に、老人は直ぐにその考へを打消してしまつた。そんなけぶりはちつとも

ゐる筈なのにまさかそんなことが。

「御隠居様、それでは行つてまゐります。あの漬物は、漬つたのを上の方にあげて置きましたから。」など、雑味噌の加減までして行つた女中のその時のそぶりを思つてみるけれど、どう思つてみてもそんなけぶりは見えなかつた。

海にも岡にもさびれた冬の濱に夕暮は來つゝあつた。今か／＼と思ひながら、老人はそれでも甲斐なく、櫓かけになつて勝手元に働いた。廣い部屋に電燈が薄赤くついてからは、人氣の少ないのが殊に寂しく見えた。假住居には道具らしい道具も持つて來てないので、間に合せの火鉢にかけた湯沸しが、ちいんちいんとかすかな音をたて出したのもわびしい。抄々しく病氣のために、幾度こゝを永住の地にしようと思つた決心したかわからなかつた。そして假住居のまゝとてうとう二年近くも過した。高商に通つてゐる弟の方が、こゝをほんとの家のやうに、土曜日毎に歸つて來るのも可愛いさうなやうな氣がする。北海道に赴任して行つた嫁の産近い心配やら、幾年か病氣ばかりを友にして、妻もなくて終つて行くであらう總領の不

見えなかつた。あんなにいろ／＼と働いてゐたものが

けれども毛先でつゝいたほどの疑ひも、老人の胸には可なりに痛い刺戟だつた。かうして二年近くもこの海邊に來てゐる病氣の弱味に、女中も賺し／＼使はなければならなかつた。その岡に乗つて我儘の限りを働いてゐた前の女中を、思ひ切つて出してやつてから、八百屋の世話で二人ばかり目見得に來たけれど、一人はこそ／＼と逃げるやうに歸つてしまひ、一人は方々を渡り歩いてるやうな女で、擦れ切つたその動作が恐ろしいやうで我慢がならなかつた。

今度のは一目見た時から老人の氣に入つた。身なりもさつぱりとしてゐるし、お行儀もちやんと心得てゐる。香の物を鉢に盛るにも、如何にも手綺麗に並べてくれる。老人はどうにかして置さつたかと思つて、下駄を買つてやつたり、前掛を買つてやつたりした。女中の方で拂ふ分まで柱庵に拂つてやつた。世話になつた八百屋には品物の禮もした。それをみんな知つて

憐しさやらが、折を得たやうに老人の胸を襲つて來た。

「おや御隠居様、女中さんはまた戻りませんですか。」老人が手桶を下げて井戸端に出て行くと、そこに歸んで風呂を焚いてゐた宿屋の番頭が驚いたやうに言つた。

「え、どうしたんですかねえ、もう大抵歸つて來さうなものがねえ。」と、老人はにこ／＼として言つた。「へえ、そりあお困りて。御隠居様、私がお汲みいたしませう、いゝえどういたしまして、さあお濡れになります。」

「あ、／＼、どうも憚りさま。」
「御隠居様、何を御用がございましたら御遠慮なく言ひつけなすつて下さいまし、お豆腐買ひでもなんてもいたしますから。」

「え、／＼ありがたう、なあにね、ちよつと今だけのことですもの。でも何ですんねえ老人になるとなにかと意氣地がありませんねえ、／＼、老人は人の前ではどんな時でも元氣であつた。取込み忘れた干物の薄白さに潮風が遊んでゐる。海

にはすつかり何物の漂ひもなくつた。その薄曇の濃くなつて行くにつれて、浪の音は夜を我儘に振舞へとその響と音とを高めて行く。慄へるやうに捲れる硝子戸の音に交つて、時々乾いた咳の聲が惱ましく聞えて来る。

老人はふと氣づいて女中のに當てた押入れの戸を開けて見た。寝巻を袖だ、みにして、蒲團の上に乗せた上に、襦と前掛と汚れた足袋とがきちんと置いてある。リスリンを入れた小さな壺が隅の方に寄せてあつた。格別異しい節もないやうなのが、益々老人を不安にした。當人は歸る積りで行つたのを、家の者達にこちらの容子などを聞かれて、そして留められてしまつたのぢやないか？ 給料はいつだつて普通よりは氣をつけて出すのだし、子供があるてはなし、格別殿しい口小言を言つて叱る譯でもないのに、かうして来る女中も、落着かないのは、みんなあの病氣を無智に怖れるからなのだらうと思ふと、何よりも老人は息子が可哀いさうになつて来る。何一つ息子の身の廻りに就ては女中に手もつけさせないやうにしてるのだから、なんとといふ情ないことなのだらう？

がた 五〇
 烈しく荒れる浪の音に下駄の音を忍ばせて来る人もなく、寂しく日は暮れて行つた。

「兄さん今日はもう駄目だねえ、秋は今日は歸らないねえ。」と、夕餉を運んで来た老人は、蒲團の上に起きかへつてゐた息子を窺ふやうに言つた。

「え、殊によつたら駄目かも知れませんが。」と息子は言葉少くなに、あらゆる運命に見きはめをつけたやうな物静かな調子で言つた。

老人は黙つて伏せた茶碗を起して、暖かい息のたつ御飯を盛つた。検温器を懐から出して、ちつと灯に照してゐた息子は、黙つて一振り二振りふると、パチンとサックに入れて胸元を掻き合せた。そして膳の方に向き直りながら獨り言ともつかずに言つた。

「熱が少し高い。」
 低いその咳きか耳にはいると、老人は急に冷水でもかけられたやうに、心細さが體中にめぐつて行くのを覺えた。
 寂しい母子の夕餉がはじまつた。浪の音は外に暗く荒れてゐる。(完)



新萬葉集 (十三)

與謝野 晶子

「浦無しと人こそ見らめ」は、海邊と云ふ程に景色の好い海邊も無いと人は見るであらうと云ふ意。

「濁無しと人こそ見らめ」は、「濁」は海邊の洲になつて居る所の稱。干潟と同じ物である。之も取り立てて洲と云ふ程の景色の好い洲も無いと人は見るであらうと云ふ意。

「よしゑ、やし」は、どうでもよい、ままよ、可なりなど云ふ意。「よし、よし」と云ふ語の間へ「ゑ」と云ふ感歎詞——之は後世「え」と云ふ軽い音に轉じて「いゑ」とか、京阪の語の「面白いえ」、「美しくいゑ」

とか云ふ類の感歎詞として現に活用されて居る。——を挿み、後の「よし」を「やし」と訛つた語である。「無けれども」は無けれども同じ意。今も口語には「無いけど」と「無いけれど」とを併用して居る。

「いさなとり」は海、濱、灘などの語に添へる枕詞。その意味には昔から異説がある。併し自分は之を漁場と云ふ古語であると断定する。詳しく云へば「いさ」は洲の意の「さ」(支那語にては「沙」と書く。)に美稱の「い」を添へたもの。海邊に「伊佐」と云ふ名の村は現に多い。猶磯、「伊勢」、「五十鈴」と云ふのも洲の意の「せ」、「そ」、「すず」に「い」の美稱を添へたのである。

「今も漁人の住む所を」「いさば」と云つて居る。「は」は場所の意の「ま」が婆行音に轉じたのである。——次に「いさな」の「な」は支那語の「魚」の古音「ニョ」の轉化。之に美稱の「せ」を添へて「真魚」と云ひ、又鯉の一種の名に「真魚鯉」と云ふものもある。それで「いさな」は「磯の魚」と云ふ意である。然るに此集の原本に「鯨魚取」又は「勇魚取」と書いた箇所のあるため——